

一家離散のあとに

渡部 わたなべ
敬直 ひろなお

私のうちは5人兄弟でした。私はちようど真ん中で長男です。すぐ上の姉は、結婚して1年目に24歳で亡くなりました。一番上の姉とは、母親が違います。父の最初の妻は、私の母の姉でした。しかし、20歳くらいで亡くなり、後に妹である母が来ました。母の親たちが決めたことです。本当は教師になりたかったらしいのですが、否応なく父に嫁いだのです。昔はそんな風習でした。

高校生の時に母が亡くなって初めて、一番上の姉とは母親が違うと知らされました。

小学校に入る前から、「人は死んだらどうなるのだろうか」という疑問と「死にたくない」という思いがかなり強くありました。「死んだら、何もなくなる、自分がどこにもいなくなる」なんだか、奈落の底に落ちていくような意識がありました。母に向かって、「お母さん、死ぬの?」「死ぬよ」「お母さん、死ぬの?」「死ぬよ」「お母さんが死んだら、ぼくもお母さんの棺桶に入るんだ」

小学校にも入らない頃でしたが、そういう

会話をしたことを覚えています。病気とは関係ないことです。夜中に目を覚まして「いつか自分も死ぬんだ」と思ったらどうしようもなく怖くなって、仏壇に向かって「死ぬことが怖くないように」などと、拜んだこともあります。それでも、死の恐怖はなくなりませんでした。

初めて行った教会で

中学1年のときに、サーカスみたいな大きなテントで宣教師が路傍伝道をしていたところに初めて行き、復活のメッセージを聞きました。

その頃は教会でも世の中でも、中学生は子ども扱いで、司会者の方が「夜は大人の集会ですから、子どもさんは帰ってください」と言われました。それでも帰らずに残りました。それが私とキリスト教との出会いです。

そこで初めて、「人は死んで終わりじゃない、イエス・キリストは罪の身代わりで死んで3日目によみがえって、信じる人には永遠の命が与えられる」と大人が確信をもって語るのを聞きました。

宣教師のことばを聞いて、その場で手を挙げて信じました。「僕はそれが欲しかったんだ」と。100人くらいの大人がいて、たくさんの方が決心をしましたが、最後まで残った信者は私ぐらいです。

その原体験は、牧師になってもずっと残っています。だから「中学生を子ども扱いしてはいけない」と思います。高岡教会でも、中学生から「大人」として数えます。

家が破産して夜逃げする

私が中学3年のときに家が破産して夜逃げをし、高校2年のときに母が39歳で亡くなりました。

父は、若い時分ある資産家の家の養子になり、母は近くからそこに嫁に来ました。田舎で、お米やガソリンなどを扱っていましたが、父は経済感覚が全くなく、いくら儲かりいくら借金があるのかも分らなかったようです。一代で家、土地、田畑、山などを全部なくし、おまけに借金を作って夜逃げをしました。

うちは「放任」で、なんのしつけもされなかったもので、結婚したとき家内がびっくりしていました。食後に歯を磨くとか、服をたたむとか、私がまったくしない。家内はそれが気になってしょうがなかったようです。

母がどうして亡くなったのか、正確には分かりません。「もしかしたら貧しさの中で妊娠して、中絶でもしたのかな」と今になって思います。母も何も言わなかったので分かりません。(以下略)